介護施設におけるターミナルケア実施が職務ストレスに与える影響

○安部幸志¹

(¹独立行政法人国立長寿医療研究センター長寿政策科学研究部)

キーワード: 高齢者、介護施設、ターミナルケア

Effects of a terminal care experience on working stress among care-workers in long-term care facilities

Koji ABE¹

(¹National Center for Geriatrics and Gerontology)

Key words: older people, nursing home, terminal care

目 的

現在、わが国では、多くの高齢者が自宅での死を希望しているにも関わらず、2008 年の人口動態統計では病院死の割合が 78.6%と非常に高い割合を占めている。また、自宅での死亡割合は、50%以下となった 1974 年以降、年々低下しており、現在では 12.7%となっている。欧米では、病院や自宅に加え、高齢者の生活の場である介護施設においてもターミナルケアを実施しており、米国では 2001 年の高齢死亡者のうち、23%が介護施設で死亡しているという (Hanson et al, 2008)。しかしながら、わが国での介護施設での死亡割合は 3%未満であり、看取りのための施設環境の整備が喫緊の課題となっている。介護施設においてターミナルケアを行うためには、本人および家族の理解と、終末期患者特有の痛み・せん妄・呼吸困難など、様々な症状へ施設職員が対処する必要がある、職員に対する負担も大きいのが現状である (Reynolds et al., 2002)。

わが国では、介護施設におけるターミナルケア実施率が低いため、基礎的なデータが不足しており、ターミナルケアを行うことが職員にどのような影響を及ぼすのか、ほとんど明らかにはされておらず、知見の蓄積が求められている。そこで本研究では、全国規模で行われた介護職従事者を対象とした実態調査のデータを用いて、ターミナルケア実施と職務ストレスおよびバーンアウトとの関連について分析を行い、ターミナルケアを介護施設で実施することによる職員への心理的影響について検討することを目的とする。

方 法

本研究では、全国規模の介護労働者のデータを対象とした分析を行うため、財団法人介護労働安定センターの 2007 年度介護施設雇用管理実態調査のうち、施設労働者調査の個票データを用いた。データを二次分析に使用するにあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから許可を得た。本研究で分析の対象としたのは、施設においてターミナルケアを実施していると回答した者のうち、ターミナルケアへ携わっているかどうかについて回答が得られ、かつ職務ストレスおよびバーンアウト指標に欠損値が認められなかった 812 名である。このうち、男性は 226 名 (27.8%)、女性は 586 名 (72.2%) であり、平均年齢は 37.3 歳 (SD = 10.4) であった。本研究では、年齢、性別、教育歴、保有資格、施設勤務年数を基本的属性として分析に使用した。また、職務ストレスとして、調査時より設定されている「労働条件」、「従事業務の量と質」、「利用者との関係」、「勤務先や上司との関係」、「同僚との関係」、「仕事以外の生活」の 6 つのカテゴリーに属するストレス変数について、それぞれ尺度得点を算出し、分析に使用した。バーンアウトは、久保・田尾 (1994) による日本語版 Maslach Burnout Inventory を分析に用いた。

結 果

まず、812 名のうち、ターミナルケアに携わっている者の割合について分析した結果、49.5%がターミナルケアに携わっていると回答していた。次に、基本属性とターミナルケアの経験との関連について検討した結果、施設勤務年数とターミナルケア経験との間に有意な相関が認められた ($r = -.11, p < .01$)。しかしながら、ターミナルケア経験と職務ストレスおよびバーンアウトとの関連については、有意な相関は認められず、職務ストレスの「従事業務の量と質」との間に有意傾向が認められたのみであった。そこで、ターミナルケア経験を独立変数とし、まず職務ストレスに影響を与え、その結果バーンアウトに至るというモデルと、ターミナルケア経験を職務ストレスとバーンアウトの媒介要因として布置したモデルを構築し、構造方程式モデリングを用いて分析を行った。その結果、ターミナルケア経験を独立変数として布置したモデルは AIC = 25.55 であり、媒介要因として布置したモデルは AIC = 70.67 であった。また、ターミナルケア経験を独立変数として布置したモデルにおいて、相関分析結果と同じく、職務ストレスの「従事業務の量と質」と、ターミナルケア経験との間に、有意傾向が認められた。

考 察

本研究では、ターミナルケア実施と職務ストレスおよびバーンアウトとの関連について、全国規模で行われた調査データを用いて検討を試みた。分析の結果、介護職員のうち、勤務経験が豊富であるほど、ターミナルケアに携わる機会が増加することが明らかとなった。また、ターミナルケア実施によるストレスへの直接的な影響は大きくはないが、ストレスに対し、外的な影響を与える環境要因の一つとして捉えることが適切であることが、モデルの分析結果から示唆された。わが国では、介護施設におけるターミナルケア実施数が少なく、その経験が職員に与える心理的影響について、実証的な検討はほとんど行われていない。高齢者の希望に沿った終末期のあり方について検討するためにも、今後、高齢者、家族、職員を対象とした、より具体的な研究が強く求められる。

引用文献

- Hanson, L.C., Eckert, J.K., & Dobbs, D. (2008). Symptom experience of dying long-term care residents. *Journal of American Geriatric Society*, **56**, 91-98.
- 久保真人・田尾雅夫 (1994) . 看護婦におけるバーンアウト・ストレスとバーンアウトとの関係 社会心理学研究, **34**, 33-43.
- Reynolds, K., Henderson, M., Schulman, A., et al. (2002). Needs of the dying in nursing homes. *Journal of Palliative Medicine*, **5**, 895-901.